届け 世界の果てまでも

令和５年１月１７日　No．５８　文責　校長　飯久保一男

面白きこともなき世をおもしろく

日本の神はどういう人が好きだと思いますか。その答えは日本最古の歴史書「古事記」に書いてあります。有名な「天岩戸（あまのいわと）」の話です。

…太陽の神アマテラス（天照大御神）の弟の神スサノオ（須佐之男命）は，暴れん坊で，いたずらが過ぎ，ついにはそのいたずらのせいで，機織りの女が亡くなってしまいます。アマテラスは堪忍袋の緒が切れて，岩のほら穴に引きこもり，岩戸を閉めてしまいました。太陽の神が引きこもってしまったので，世界が暗闇に覆われてしまいます。困った八百万（やおよろず）の神々が集まり，アマテラスを外に出そうとしますが，アマテラスは何をやっても岩戸を開こうとしません。そこで神々は岩戸の前で楽しく踊り，祭りを始めたのです。すると，その楽しそうな声につられ，アマテラスが岩戸から顔を出しました。そのとき，

〇八百万の神々の顔（面）が一斉に（白く）光りました。
　これが「面白い」の語源だそうです。
〇八百万の神々は手（た）を伸ばし（のし）て喜びました。
　これが「たのしい」の語源とのことです。

光が閉ざされて暗闇になってしまったときに，日本の神々は祭りをして踊ることで，光を取り戻しました。日本の神は「面白い」人や「手伸（たの）しい」（以降，楽しいと漢字で書きます）人が好きなのです。日本は神も踊ります。日本のお祭りは踊りが付き物です。世界の国々にも様々なダンスや踊りがありますが，神自身が踊るのですから，日本人はもともと踊りが好きな民族なのです。

…運動会の１・２年生のダンスの練習のときのことです。１年生のある子がふてくされて，練習の列には入らず，離れたところに座っていました。ところが，ダンスの曲がかかった瞬間，その子は急に踊り出したのです。ダンスが嫌でふてくされていたのではなかったようです。子どもはダンスが大好きです。

神は，　面白くしようとする人には，どんどん面白いことを，恵んでくれるそうです。
　　楽しくしようとする人には，どんどん楽しいことを，恵んでくれるそうです。
　　感謝する人には，感謝したくなることを，次々と恵んでくれるみたいです。
そして，愚痴を言う人には，愚痴を言いたくなることを，次々与えるようです。

以前６年生を担任したときのことです。子どもたちの発案で，修学旅行の宿舎の夜，広い部屋を借りてレクレーションをしました。学校でもやったことのある「伝言ジェスチャー」のような内容のレクだったのですが，とっても×2盛り上がり，普段はほとんど感情を表に出さない子が「こんなに楽しいレクは初めて！」と興奮して話してくれました。修学旅行の夜 ＋ みんなで泊まる宿舎でやるレク ＋ 子どもたち全員が面白くしよう・楽しもうとしたことのプラス効果が，子どもたちの面白さ・楽しさを最大限のものにしたのです。

逆もあります。学級のレクレーションを学級役員が企画して，面白そうで楽しそうなレクをやったのですが，冷めた感じで乗り気でない子どもたちが数人いたことで，全然盛り上がらず，面白くも楽しくもなかったなぁということもあります。

同じことをやったとしても，気持ちのありようで，その内容や結果は違うものになってしまいます。どんなに面白く楽しい内容でも，気持ちが乗らなければ面白くも楽しくもないものになってしまいます。

漢字の練習をすることや計算問題をいくつも解くことに対して，面倒くさいなぁとかつまらないなぁとか口に出していると，ますます面倒くさくなり，つまらなくなります。例えば，

・今日は，１つの漢字を１個だけ書いて覚えられるか集中してやってみよう

・今日は，１つの計算につき，１分で解けるかやってみよう

など自分で目標を決めて挑戦してみると，漢字練習が面白く，計算練習が楽しいものになっていくかもしれません。もちろん，大笑いするような面白さ・楽しさとは意味が違います。

そんなことを考えなくても漢字の練習は好きとか，計算を解くことは好きという子どももいます。新出漢字を学習するとき，「へん」に注目して，「へん」がもつ意味を考えながら練習をしたり，計算を効率よくする方法を考えながら解いたり，ノートをキレイにまとめることを楽しんだり，などと自ら興味をわかせながら取り組んでいるという子どももいます。

しかし，なかなかやる気がわかないときもあるのも普通のことです。そんなときに，自分なりの面白くする方法，楽しめる方法をもっている人は，気持ちを切り替えることができます。**面白くするのは自分次第です。楽しくするもの自分次第です。**

面白きこともなき世をおもしろく
すみなすものは心なりけり　　高杉晋作

高杉晋作は江戸時代の長州藩の武士です。奇兵隊を創設して倒幕を目指しましたが，結核に侵されて２８歳の若さで亡くなっています。この句は，晋作の辞世の句といわれています。上（かみ）の句を詠んだ後咳き込んでしまい，傍らにいた野村望東尼が下の句を詠んだとされています。それを聞いた晋作は，それでいいとうなずき，「面白いのう」と言って亡くなったという逸話が残っています。下（しも）の句の意味は「するものは心である」ということですので，上の句と合わせて考えると「心のありようで，世の中は面白くもなるしつまらなくもなる」という意味になります。

「この人って，いつも面白そうにやっている」「何をやらせても，この人は楽しそう」という人がいます。子どもたちの中にもいます。何をしていても，どんな状況でも，面白そうで，とても楽しそうなのです。同じことをやっているのに，とても面白そうに，楽しそうにやっていく人は，時間が経つのが早いんだろうなぁと思います。そういう人は人気があって，周りに人が集まります。その人の力を借りて，自分が面白く，楽しくなりたいのかもしれません。

つまらないなぁ，早く終わらないかなぁと思っていると，時間は長く感じます。早く終わらないかなぁと思う人は，その時間を無駄にしてしまうこともあります。終わったら〇〇をしようなどと考えていると身が入りません。いつも楽しめる人，いつも面白そうな人は，つまらないという時間がなく，他の人がつまらないと思うことにも，面白さや楽しさを見つけ，つくり出すことができる人だと思います。

「今」という時間をどう過ごすかが大切です。そのためには，何度も書いてきていますが，自己肯定感を高めること，ポジティブな思考をもつことなどが必要だと思います。

今年度の校長通信のNo.８に，私のやる気をわかせる方法として，使い切った赤ペンを飾っておいてそれを眺めることで，もっと赤ペンを使うぞと気合を入れる話を書きました。巨摩高時代，やる気にムラのあった私は，友だちと高校の購買で，同じボールペン（中のインクが見える安価なやつ）を買って，家での勉強に使いました。翌日に，インクの減り具合を見せ合うことで，刺激を与え合っていました。